一子を念ふ至情から出た洗面洗淨の二卷

神保如天

一

高祖承陽大師の典座教訓に、喜心老心大心の三心の說いてあることは誰れでも知つてゐる。其の老心とは父母の心也、譬へば父母の一子を念ふが若し、貧者富者、强ちに一子を愛育す、其の志いかん、外人識らず。父と作り母と作りて方に之を識る。自身の貧富を顧みず、偏へに吾子の長大ならんことを念ふ。自の寒きを顧みず自の熱きを顧みず子を蔭ひ子を覆ふ、以て親念切々の至りと爲すと示してある。然し此れは單なる老心の說明ではない、高祖自身が持つ親念切々の至情を聊か文字にうつされたものに相違ない。

又眼藏の四攝法の卷に布施愛語利行同事の四枚の般若が擧げてある、愛語といふは衆生を視るに先づ慈愛の心を發し顧愛の言語を施すなりといひ、又慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なりとある。是れも亦單に愛語を定義し說明して他に向つて斯く愛語せよと敎へられたものではない。高祖自身が衆生を慈念すること赤子の如くなる親念切々の至情から迸り出づる一言一句が愛語であつたことを示してゐるのである。

高祖には血族的の赤子を有たれた經驗は無かつたけれども、衆生を赤子と視る慈愛深い佛心大慈悲心即ち親心を以てすべてのものを抱擁し顧念し愛育するところの老心を豊かに所有して居られた。衆生を慈念することにおいては產みの親よりもモツト切なる心をもて赤子の我等を懷き抱へ哺み育てゝ下さつたことを、事實の上に二三取り立てゝ申述べて見たいと思ふ。

二

今現に永平元禪師清規といふものが世に行はれてゐる、乾坤二冊であつて、典座教訓を始め知事清規に至る六篇の清規が盛られてある。これ等の清規は謂ゆる叢林の規矩であり公界の道場に於ける禮儀であり公職知事等の心得であつて、道場中心の規矩と云つてもよし、又は團體道德、成人教育といつてもよい種類のものである。これ等の一々を熟讀玩味すれば、其の片言隻語といへども父母の子を念ふ情の發露ならざるはない、例へば對大己法の如き、實に徹悃の婆心、細に入り微に入つて手を取つて教ふるが如く示されてある。又赴粥飯法の如き、鉢盂の展べ方、匙筋の持ちやう、食ひ方飲み樣、苟くも食事に關することは細大漏らすことなく親切を極めて教へられてある。この親切を極めて教へられてある。この親切は他人では出來ることでない、親なればこそ、子なればこそと感激せずには居られない。眼藏の家常卷に佛祖の屋裡には茶飯これ家常なり、この茶飯の儀久しく傳はれて而今の現成なり、このゆゑに佛祖の茶飯の活計來れるなりと。佛祖屋裡には必らず佛祖の茶飯があり活計がある、佛祖屋裡の茶飯を現成せしめ、佛祖家常の活計をするには茶裡飯裡必らず佛祖の法に依らねばならぬ。其の佛祖の法とは清規である。赴粥飯法を知らねば佛祖の家常を現成せしむることが出來ない。對大己法も知らず、辨道法も知らなかつたならば佛祖の活計をすることが出來ない。吾人をして立派に佛祖屋裡の家常を活計せしめる爲めには高祖は懇切の極を盡し親念の切々を傾けて此の清規を示して下さつたのである。これ實に慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へての愛語でなくて何であらう。

三

斯うした心持ちで大清規を拜覽し、直ぐ其の眼を轉じて正法眼藏を再度繰返して看てゐると其の中に一入血に滲み涙に濕れた二卷を見出したのである。それは洗面の卷と洗淨の卷とである。洗面の卷は名の如くお面を洗ふ法である洗淨の卷は便所に行く法、大小便をする法である。考へても見よ、いづれの敎祖、宗祖といはれる人に、洗面を敎へた敎祖があるか、どこかの宗祖に大小便をする法を示した祖師があるか、本當に子を懷ふ親心の切なるものは、眼やにをとり鼻糞を除けてお顏を拭いてやるところに始まる、モット進んではお尻をきれいに拭いてやることである、これは親で無くては出來ぬことだ。我が高祖はお面をさつぱりと拭いて下され、お尻をきれいにふいて下された、なん

と慈念衆生猶如赤子は文字に書いたり、言語上の形容ではありますまい。高祖には衆生は眞實產んだ赤子なのである故に鼻をかんでやつたりお尻をふいてやつたりなさる。高祖大師は悟りや教理の上での生佛不二だの父子一體だのと云ふのではなく、事實の上に父であり母であり親心であつて、其の外の何物でもない。

四

洗面の卷には佛法にはかならず浣洗の法さだまれり、或は身を洗ひ心を洗ひ、足を洗ひ、面を洗ひ、目を洗ひ、口を洗ひ、大小二行を洗ひ、手を洗ひ、鉢盂を洗ひ、袈裟を洗ひ、頭を洗ふ、これらみな三世の諸佛諸祖の正法なりとある。佛法は一言にしていへば浣洗の法である。浣洗とは清淨、不染汚のことだ。故に身を洗ひ心を洗へば國土が清淨になる、目を洗ひ口を洗へば日月清明となる、手を洗ひ足を洗へば山川草木皆清淨となる、これが本當の洗面法だ洗面一回し來れと古人が云つたが、現代の國民、あらゆる社會人、皆一度つらを洗はなくては駄目だ。故に高祖は、もしおもてをあらはざれば禮をうけ、他を禮するとともに罪ありと。洗面せずして他より敬禮をうくるも罪であり、洗面せずして他を敬禮するも罪である。猫さへ顏を洗ふに、人間にしておもても洗はずに自禮禮他するは畜生にも劣る。今日の社會人はお互ひに洗面もせずに交際するものだから人間としての禮儀が整はない。自禮禮他、能禮所禮性空寂なり、性脫落なり、かるがゆゑにかならず洗面すべしと高祖は自から涙をこぼして洗面せよと教へて下されてある。自他互ひに洗面して人間と人間とが相敬禮すれば必らず性空寂、性脫落して圓滿な人間の和合相があらはれる。

五

洗ふといふことは穢れてゐるから洗ふとばかり思つてはならない、穢れておれば尙更ら洗ふがよい、たとひ淨くとも洗ふのが佛法の定まれる洗ひ方である。吾人が毎朝洗面する、さほど汚れてゐるとは思はない、けれども洗ふ。便所に行つて歸りがけに左ほど手を穢したとも思はないが洗はずにはおられない、穢れたときは尙ほさら洗ふ、これが佛法の洗面法であり洗淨法である。それを高祖は親切に示されてゐる、云くたゞ佛法の修證を保任するとき用水洗浣、以水澡浴等の佛法つたはれり、これによりて修證するに淨を超越し不淨を透脫し、非淨非不淨を脫落するなり。しか

あれば即ち未だ染汚せざれども澡浴し、すでに大清淨なるにも澡浴する法は、ひとり佛祖道のみに保任せり、外道のしるところにあらずと。不淨を洗ひ非淨を洗ふことは人の敎ふるところであるけれども、淨不淨を透脫し非淨非不淨を脫落した澡浴法を示されたのは高祖唯一人である。不染汚を澡浴し大清淨を澡浴するを無爲の功德とし無作の功德とする、これは佛祖道のみに保任するところであつて、外道の知るところではない。是くの如き慈悲徹悃の洗面法を我れ等赤子の爲めに嚙んで哺めるやうに懇切に敎へて下されたのである。洗面には先づ各々の新しい手巾(タヲル)を携ふること、洗面架(一定の洗面所)で洗面すること、楊枝を使ふこと、口を漱ぐこと、舌を刮くこと、面を洗ふことその面を洗ふのに、兩手に面桶の湯をすくひかけて、しかうしてのち摩沐すべし、涕唾鼻涕を面桶の湯におとしいるゝことなかれ、かくのごとく洗ふとき、湯を無度につひやして、面桶のほかにもらしおとしちらして、はやくうしなふことなかれ、垢落ち膩除うりぬるまで洗ふなり、耳裏あらふべし、眼裏あらふべし、或は頭髮頂顙までも洗ふべし洗面のあひだ桶杓ならしておとをなすことかまびすしくすることなかれ、湯水を狼藉にして近邊をぬらすことなかれ等々、實に細に入り微に入つての注意がしてある。母親が四五歲の小兒に顏を洗つてやる時の注意の通りである、親心でなくして、これが吾が產みの子でなくして、斯うした親切の溢れる敎へが出來得るものではない。

六。

洗淨の卷に至つて一層審細なるものがある。洗淨の第一は爪を剪ること、十指の爪をきるべし、十指といふは左右兩手の指の爪なり、足指の爪おなじくきるべし、爪を長くすべからずとある。次には淨髮すること、淨髮を會せざる者は眞箇これ畜生、長髮は佛祖のいましむるところなりと誡められた。それより東司(便所)に上る法、袴口衣角ををさめて、門にむかひて兩足に槽唇の兩邊をふみて蹲居し阿す、兩邊をけがすことなかれ、前後にそましむることなかれ、このあひだ默然なるべし、隔壁と語笑し、聲をあげて吟咏することなかれ、涕唾狼藉なることなかれ、怒氣卒暴なることなかれ、壁面に字をかくべからず、厠籌をもて地面を劃することなかれ、阿屎退後すべからく便籌すべし、又紙を用ふる法あり、故紙を用ゐるべからず、字を書きたらん紙用ゐるべからずと、これほど迄に叮嚀に便所の用心を

示されてある。恐らく現今の親御達は子供に對して是れだけの便所教育はしてあるまいと思ふ。立派な紳士淑女も表向きの體裁を作ることは可なり御存じのやうだが、御手洗所の教育は幼稚園にも、は入つてゐない人が多い樣だ。次に高祖は厠屋(便所)を以て七佛の道場なりといはれた、洗淨法は諸佛の威儀なりと示されてある。故に東司に上るには本堂や佛殿に上ると同じ謹嚴さと嚴肅さを以て對せねばならぬ。高祖云く厠屋は佛轉法輪の一會なり、この道場の進止これ佛祖正傳なりと、又云く佛厠屋裏の威儀は洗淨なり、祖々相傳し來れり、佛儀のなほのこれる慕古の慶快なりあひがたきにあへるなりと。洗淨の威儀は祖々相傳の正法にして厠屋は佛轉法輪の一會たるにおいては實に佛法の窮盡と申すべきである洗淨の法實に是れ正法眼藏たる所以、何人も茲に於て會し去ることが出來るであらう。

七

大清規の上の六則の垂示は前に云つたやうに公界の道場に於ける國體訓練としての規定とも見られるが、この洗面洗淨の二法は個人教育であり、彼れを成人教育とすれば是れは幼少の、まだ親の膝下で腕白を云つてゐる小兒に對するが如き態度で示されたものである。成人教育には教ふる者は先生、習ふ者は生徒といふ關係になるが、家庭で幼者に教ふるのは師弟關係でなく親子の親密さの間に止むに止まれぬ親心の至情が子供に働きかけて、教訓となり規矩となり制裁ともなるであらう。然し其の一つ一つが親心の切々なる至情のあらはれで所謂親言親口なるものである。斯うした見方で洗面洗淨の二卷を見たときに何とも云へない親しみと懷かしさとを覺え、初めて親の聲を聞き父の言葉が耳に觸れたかのやうに感じて來る。而して其の一言一句に親の溫い肉身に觸れ血に滲み涙に濕ふてゐるかの如く感ぜられてならないのであるこの二卷ばかりでなく、九十五卷のどの卷もどの卷もが高祖の血滴々であり涙の記錄であることが、しみ〴〵と感ぜられて來る。今までは難解で難解でどうにも齒の立たなかつた眼藏も、どうやら親の言葉であり父の語であるといふ赤子の心持ちからモー一度見直さうと思つてをる。作法これ宗旨なり、得道これ作法なりの眞意もどうやら微笑みのうちに會得せられて來たやうに思はれる(八、二、二稿)